

# 拠点校の実践から ～ぜひ、伝えたいこと～

<平成19・20年度 岐阜県小学校英語活動拠点校>

各務原市立稲羽西小学校  
大垣市立中川小学校  
郡上市立八幡小学校  
恵那市立三郷小学校

山県市立伊自良南小学校  
海津市立高須小学校  
富加町立富加小学校  
下呂市立東第一小学校

各拠点校における授業公開、実践発表及び質疑応答を通して、自らの体験として語られた「外国語活動」の意義や魅力を拾い集めてみました。

「『コミュニケーションを図ろうとする態度を養う』とは、決して、ペラペラと話すことができるようにすることではありません。聞く側も話す側も分かり合おうと『笑顔』や『思いやり』をもって接することが大事なのだと子どもたちに気付かせていくことだと分かりました。」

「職員研修で、学級担任が英語を話すことを楽しみ、表情豊かになることの必要性を学びました。そんな学級担任の姿を見て、子どもたちの活動への意欲はぐんぐん高まりました。」

「『先生、私ね、英語の時間が1番好き。だってね、たくさんの友だちと交流できるもん。』と言ってきた子がいます。実は、この子は、普段はなかなか自分の思いを言うことができず、友だちの輪から離れたところにいることもあった子です。」

「子どもたちが積極的に自分の思いを伝えよう、仲間の話を聞こうとする姿のよさを精一杯認め、励まそうとしました。ほめることで学級の雰囲気はどんどん良くなりました。」

「目と目を合わせて話をするなど普段の生活では抵抗を感じることで、英語を介せば自然にできるようになってきました。今では、男女だれとでも交流する姿、相手の顔を見ながら一生懸命自分の思いを伝えようとする姿が、教室のあちらこちらで見られるようになり、温かな学級になったと感じています。」

「私は英語が堪能ではありません。でも、今、英語活動の時間が大好きです。それは、クラスの子どもたちが他の教科では見せない明るく積極的な姿、あきらめずに工夫する姿を見せてくれるからです。」

「ALTが教えるのもよかったです、学級担任と一緒に活動すると子どもたちが生き生きとして、以前よりも意欲的に楽しく活動できるようになりました。」

「外国語活動の授業で、子ども同士をいかにコミュニケーションさせるかを考えることは、担任の一人一人の子どもに対する児童理解をいかに生かすかということに他なりません。他の授業でも「個の実態把握による授業改善」とよく言われますが、外国語活動こそ「個の児童理解に基づくコミュニケーション改善」が大切であるということに気がきました。」

「外国語活動についての校内研修は、『お互い分からない者同士』ということから、研修の必然が生まれます。だからこそ授業づくりに際しても、お互いがいろいろな意見を出し合いながら、よりよい授業を目指して全職員が一丸となることができました。」

「職員室では、『英語活動を行うことで人間関係が豊かになってきましたね。』『人とコミュニケーションする楽しさを感じる子が増えてきましたね。』と話しております。」

「担任が自分をさらけ出し外国語活動の授業を堂々で行うことによって、普段なかなか見せられない担任の表情（笑顔や困った時の表情等）を必然的に示すことになり、それが子どもたちとの信頼関係の深まりにつながり他の授業における指導にも生きました。」

「英語活動では『英語』という負荷を与えることで、言語によるコミュニケーションの難しさや、それゆえに、分かり合えた喜びの大きさに気付いていけると考えています。また、『英語に親しむ』体験によって、言語のもつ魅力に気づき、言語を通してその国の文化の一端にも触れてほしいと願っています。このことが、コミュニケーション能力の素地を育むことにつながっていくと捉えています。」

「この研究を通して、英語が専門でない教師でも、学習過程やねらい等が明確になっていれば、子どもたちの実態や仲間関係を把握している学級担任のよさを生かしながら、意図的に指導・援助できることを実感しました。これは逆に、子どもたちも担任の人となりを知っているので、失敗しても頑張る姿を理解したり、それによって安心したりして、子ども自身、間違いを恐れず進んで取り組む姿につながっているようです。」

「『英語の勉強をして自信がついてきたから、他の時も進んで話しかけたりするようになった。』という子どもの声からもエネルギーをもらいました。」

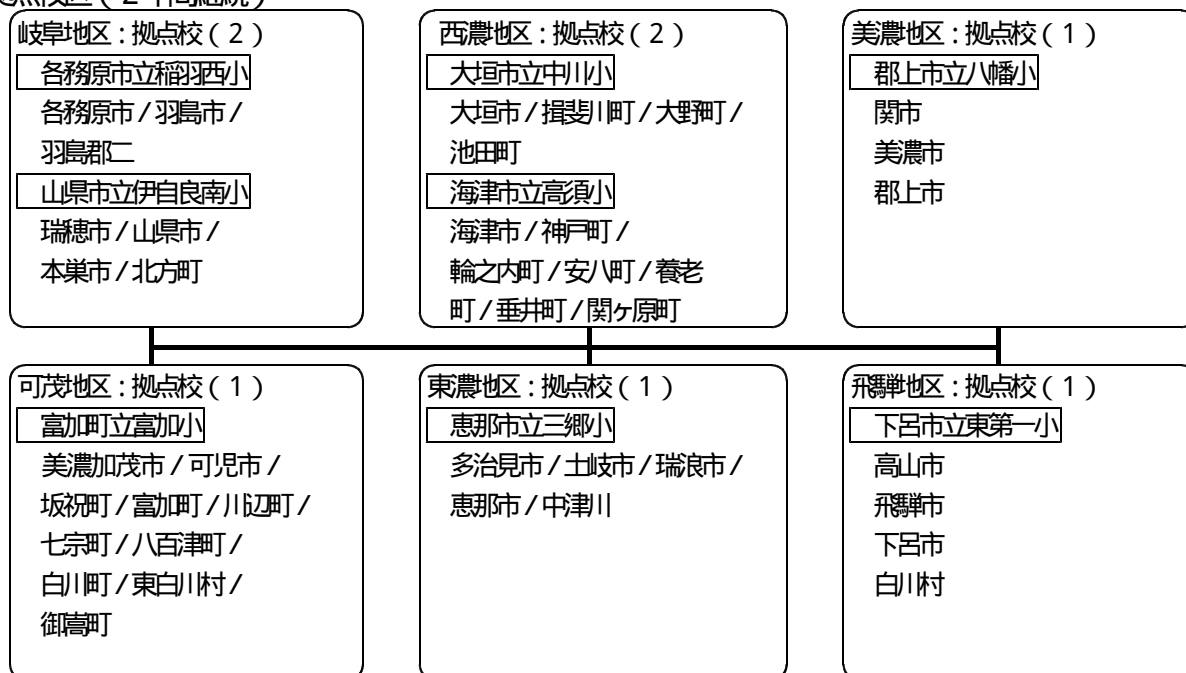
「私は英語が苦手、ALTとの打ち合わせをどうやったらうまくできるのかとても不安でしたが、案を持ってチョコレートを食べながら行うなど気軽に行くと和気藹々とできるようになりました。」



具体的には、どんな取組が行われたのでしょうか・・・

# 平成19・20年度 小学校における英語活動等国際理解活動推進事業

## 1. 拠点校区(2年間継続)



## 2 実績

### 拠点校区ごとの実践交流会の実施

#### <平成19年度>

拠点校	実施日	公開学年	拠点校区内小学校数
・各務原市立稲羽西小学校	2月29日(金)	第5学年	32校
・山県市立伊自良南小学校	2月15日(金)	第5学年	29校
・大垣市立中川小学校	2月7日(木)	第5,6学年	43校
・海津市立高須小学校	2月5日(火)	第6学年	37校
・郡上市立八幡小学校	12月11日(火)	第5学年	47校
・富加町立富加小学校	2月15日(金)	第5学年	42校
・恵那市立三郷小学校	2月19日(火)	全学年	63校
・下呂市立東第一小学校	1月31日(木)	第5,6学年	44校

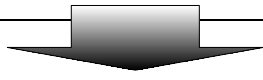
#### <平成20年度>

・各務原市立稲羽西小学校	11月28日(金)	第6学年	32校
・山県市立伊自良南小学校	10月22日(水)	第5学年	29校
・大垣市立中川小学校	10月21日(火)	第5,6学年	43校
・海津市立高須小学校	11月26日(水)	第5,6学年	37校
・郡上市立八幡小学校	12月16日(火)	第6学年	47校
・富加町立富加小学校	11月6日(木)	第6学年	42校
・恵那市立三郷小学校	11月7日(金)	第5,6学年	63校
・下呂市立東第一小学校	10月30日(木)	第5,6学年	44校

各拠点校区を共通して明らかにできたこと

拠点校における授業、実践発表及び質疑応答を通して、外国語種加の意義や魅力を、自らの体験から伝えることができた。

・そして、どのようなことを大切に指導するとよいのか等について共通に協議することができ、外国語(英語)活動をスムーズに導入するための取組を県内一斉にスタートを切り、方向付けることができた。

- 
- (1) 外国語活動はコミュニケーション能力の素地を養うことをねらう。  
文法や定型表現を覚え込ませるのではなく・・・  
積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を大切に。
  - (2) 単元や単位時間を通した無理のない段階的な指導が有効である。  
表現を無理矢理覚えさせるのではなく・・・  
児童が無理なく英語に慣れ親しむことができるよう指導過程の工夫を。
  - (3) 児童が意欲的に取り組むことができる魅力ある活動が重要である。  
練習や暗記、単なるゲームに終始するのではなく・・・  
児童が意欲的に参加できる体験的な活動を設定、説明ではなく魅力的な提示を。
  - (4) 外国語活動は学級担任が行う。  
ALT任せではなく・・・  
指導計画から授業の実際まで、学級担任が主体となって。
  - (5) 校内指導体制の充実が必要である。  
一部の先生任せになってしまうのではなく・・・  
推進リーダーを決めたり、委員会を組織したりして、全校体制で。

### 3 平成20年度の成果

小学校英語指導上、大切にしたこと

#### (1) コミュニケーションを重視する

英語の語彙や表現を習得させることを目的とするのではなく、英語を使って目的を成する活動に取り組ませることを通して、相手の表情や言語に注意を向ける姿、様々な工夫して意思疎通を図ろうとする姿等を生み出し、コミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を含めたコミュニケーション能力の素地を一人一人に養う。

#### (2) 学級担任が主体となって指導する

児童の興味・関心やつまずき、適切な助言方法等について最もよく把握している学級担任が児童の主体的な活動を引き出しながら指導・援助し、英語によってコミュニケーションを図ろうとするモデルとしての役割を果たすことで、コミュニケーション能力の素地を一人一人に養う。

平成19年度の課題をどう解決したか

#### 【課題1】コミュニケーションを図る姿の具体化

- ・パターンを覚えて、英語を使う姿      気持ちや事実や考え等を、素直に楽しく伝え合う姿
- ・ゲーム      活動



目指す姿を具体的に描き、その具現のために活動を設定することができた。単に表現を暗唱させてそれを使っていれば活動しているという認識から、英語という tool を使いながら、思いを伝え合う心の込もったコミュニケーションが大切であるという認識が高まった。

ゲームによる楽しさ (fun) ではなく、活動を通して目的が達成できる、知的な気付きを伴うような体験的な活動による面白さ (interesting) が大切であるという認識が深まった。

#### 【課題 2】素地のとらえ・ねらいと評価の具体化

・「楽しむ」「慣れ親しむ」「気付く」「~しようとする態度を育てる」素地の3観点  
例「英語を使って道案内し合うゲームを仲間と一緒に楽しむことを通して、道案内で使われる相手の行動を促す英語表現に慣れ親しみ、お互いの理解を確かめ合いながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」 単元、授業の終末で担任が認める姿の具体化



単元の指導目標は、単元を通してコミュニケーション能力の素地の3要素が統合的に育成されるよう、総合的に表記する必要があることが明確になった。

各単位時間においてはさら、「慣れ親しむ」のか、「気付く」のか、「~しようとする」のかのという意図をもち、指導内容の重点化を図ることが効果的であるということが明確になった。ただし、重点化を図る場合においても、外国語を用いることと、体験的に学習することを常に大切にする必要があることも明らかになった。

#### 【課題 3】英語ノートの実践的検証 本年度中に全学校へ配布される前段階としての活用事例



これまで作成してきた年間指導計画がある中、英語ノートをどう活用するかについて効果的な考え方を提示することができた。

自校の年間指導計画になくて、英語ノートに扱われている題材や表現等の指導内容や活動の全部又は一部を取り入れた事例を開発することができた。特に、「言語や文化に対する体験的な理解」については、大いに参考となった。

児童の実態に応じて、英語ノートを活用することが大切であることが明らかになった。英語ノートに示されている活動を、さらに一工夫加えることでより効果的な指導ができた。題材の順番も各学校が工夫すればよい。例：文字は6年生の最後に扱うなど。

ただし、英語ノートをそのまま順番に教えていけばよいという安易な考えに陥ると、コミュニケーション活動ではなく、英語の教え込みにならないかという危惧も提示できた。

#### (課題 4) 近隣の小学校、中学校との連携



実践交流会へ、近隣の小学校や校区の中学校の英語教員が参加したり、近隣の小学校の校長先生方が参加されたりするなど、昨年度の実践交流会から一層参加者の幅が広がった。まずは実際に授業参観をし合うことの大切さが認識できた。

#### 4 来年度以降の課題として

##### (1) コミュニケーションのある授業を一層充実させよう！

- ・外国語活動の目標や内容について一層の徹底を図るとともに、高学年の年間指導計画の改善、英語ノートや電子教材の効果的な活用、望ましい評価の在り方等について研究実践を深めたい。

##### (2) 教員研修や実践推進組織を充実させよう！

- ・校長先生や教頭先生、新たな中核教員の先生方や希望する先生方に対する研修の機会の充実を図り、外国語活動を実践する仲間の層を広げていきたい。

##### (3) 積極的な連携や情報共有を進めよう！

- ・中学校区内の小学校同士、小学校と中学校が、お互いの英語（活動）の授業参観をしたり、指導計画を交流したりして、効果的な指導方法について実践を深めたい。